學習、實踐「我們」的文化~以傳承者培育事業研習生的體驗談起~

「私たち」の文化を学び、実践する～伝承者育成事業研修生としての体験から～

Learning and Practicing "Our" Culture: The Experience of an Intern in the Inheritors' Training Project

文・圖 | 中井貴規 NAKAI takanori
（公益財團法人愛努文化振興・研究推進機構 博物館營運準備室 研究員）
譯者 | 陳由瑋（政治大學民族學系博士生）

文責・図 | 中井貴規 NAKAI takanori
（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 博物館運営準備室　研究員）
訳者 | 陳由瑋（政治大学民族学学科博士後期課程）

2013年から始まった「イランカラプテ」キャンペーンのロゴマーク。アイヌ語とアイヌ文様を組み合わせたデザインを使用し、アイヌ語の「こんにちは」で北海道の特色を押し出している。（出典：「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会 http://www.irankarapte.com/）

2013年迄今產官學合作舉辦的irankarapte活動標誌。設計概念結合了愛努語與愛努紋樣。以愛努語的您好打造北海道的當地特色。（圖片來源:「イランカラプテ」キャンペーン推進協議 http://www.irankarapte.com/）

私は旭川市生まれのアイヌである。2014年4月から2017年3月まで白老町に住み、伝承者育成事業に参加してアイヌ文化について学んだ。

伝承者育成事業

伝承者育成事業とは何かというと、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が行う伝統的生活空間再生事業の一環として実施されている事業である。アイヌ文化を根底から支える

我是旭川市出生的愛努族。2014年4月起到2017年3月為止我居住在白老町，參加傳承者培育事業，學習愛努文化。

愛努口傳文學的各種體裁

要說什麼是傳承者培育事業的話，這項事業是以公益財團法人愛努文化振興・研究推進機關所進行的傳統生活空間再生事業其中一環的形式下而實施。其目的是為求從底層培育維持愛努文化的總合性人才或推動活動。以實施

総合的な人材の育成や活動の推進を図ることが目的とされている。アイヌ語はもちろん、アイヌ文化に関する衣食住・工芸・芸能・信仰・儀礼・教材開発などの分野について、研修が実施される。各地から集まったアイヌを対象とした研修が、白老町にある一般財団法人アイヌ民族博物館にて実施される。研修期間は3年間。2017年度からは第4期が開始されているが、私は第3期生にあたる。

サケ漁の研修

先ほど述べたように、私は2014年4月から2017年3月までの3年間、伝承者育成事業の研修生として、アイヌ文化を学んだ。本稿では、その研修活動の中でも、特に印象に残っているmarek を用いたサケ漁研修を紹介したい。

写真1で私が両手に持っている道具は、marekと呼ばれる、サケやマスなどの魚を突いて獲る道具である。marekの先にぶら下がっているものは、sipeあるいはkamuycepなどと呼ばれるサケである。左腰からぶら下げている棒はisapakikniなどと呼ばれるサケの頭を叩く道具である。

写真1. marekでサケを獲った写真。白老町を流れるウヨロ川にて。

照片1. 用marek捕鮭的照片。地點是在流經白老町的Uyoro川。

的研修領域來看，愛努語就不必說了，還有食衣住、工藝、藝能、信仰、儀式、開發教材等愛努文化相關領域。研修對象是來自各地的愛努族，實施地點則在白老町的一般財團法人愛努民族博館。研修期間則為3年。2017年度開始是第4期，我算是第3期研修生。

捕鮭研修

如同先前所述，我是在2014年4月起到2017年3月為止的3年內，以傳承者培育事業研修生的身分，學習愛努族文化。這次研修活動中，特別讓我留下深刻印象的是使用marek的捕鮭研修部分，我想在本稿中介紹這一部分。

照片1中我雙手所持的道具，是用來捕刺鮭魚或鱒魚等魚類的漁具，名稱叫做marek。marek的前端所勾吊的物體，是稱作sipe或是kamuycep等名稱的鮭魚。我左腰所掛的棒子是用來敲打鮭魚頭部的道具，叫做isapakikni等名稱。

◎小事典

1. 伝承者育成事業におけるサケ漁は、北海道より特別採捕許可を得て行っている。

   傳承者培育事業中所進行的捕鮭活動，是取得北海道政府特別採捕許可。

marekは、写真2のように、鉤銛を紐で結びつけた棒にさらに長い柄を繋いでできている。研修では、紐をツルウメモドキ、棒をノリウツギ、柄をアオダモという木を用いて作った。

marek如同照片2所示，是用繩子將鉤刺綁在木棒上，再用長柄連接在一起。研修時繩子用南蛇藤、木棒用圓錐繡球、長柄則用青 這些的樹木。

写真2. 私が作ったmarek。作り始めて完成させるまで1週間ほどかかった。
照片2. 我製作的marek。從開始製作到完工為止需費時1週左右的時間。

写真3. ① 2015/2/26 ツルウメモドキの採集。② 2015/9/10 ノリウツギの採集。③ 2015/8/27 に採集したアオダモの処理。
照片3. ① 2015/2/26 採集南蛇藤。② 2015/9/10 採集圓錐繡球。③ 2015/8/27 處理採集到的青梯。

ツルウメモドキを採集・処理する。その内皮の繊維が、鉤銛を結びつける紐になる。ノリウツギを採集・処理して、鉤銛が入る部分とする。アオダモを採取・処理して、柄とする。そうして鉤銛が入る棒を作り、鉤銛の先と棒の先が同じ向きになるように、紐で鉤銛と棒をつなぐ。最後に、鉤銛のついた棒を柄に取りつけて完成である。〔写真3〕

南蛇藤經採集、處理後，將其內皮纖維製作成用來綁鉤刺的繩子。圓錐繡球經採集、處理後，當作鉤刺放置的部分。青槅經採集、處理後當作長柄部分。然後製作放置鉤刺的木棒，將鉤刺前端與木棒前端朝向相同的方向後，再用繩子連結鉤刺與木棒。最後，將裝有鉤刺的木棒和長柄組裝在一起便完成。（照片3）

④ 2015/10/15 ノリウツギの加工。

④ 2015/10/15 加工圓錐繡球。

⑤ 鉤銛に紐をつけているところ。

⑤ 將鉤刺綁上繩子。

サケ獲り

2015年10月中旬頃に私のmarekが完成したが、紐の材料を採取したのは、2015年2月26日頃なので、そこから数えると、実際にはmarekを作るのにもっと長い期間かかっている。

そうして、完成したmarek を持ってサケを獲りに行った。サケを見つけたら、なるべく音をたてないように近づき、鉤銛の部分で魚を突く。鉤銛が魚に刺さると、鉤銛が溝から外れて紐でぶら下がる。marekがきちんと作られていれば、サケが暴れても外れないものである。獲ったら、写真4のように、ヤナギなどで作る30～40センチメートルくらいの isapakikniなどと呼ばれる棒でサケの頭を叩く。

捕捉鮭魚

2015年10月中旬左右我完成我的marek，但因為採集繩子的材料是在2015年2月26日左右，如果從這個時間點算起的話，實際上製作marek要花上更長一段時間。

接著，就是拿著完成的marek去捕捉鮭魚。發現鮭魚後，盡可能不要發出聲響靠近鮭魚，用鉤刺的部分刺魚。鉤刺刺中鮭魚後，鉤刺會脫離溝槽，鉤刺連結繩會向下垂落。如果marek有用心好好製作的話，即使刺中的鮭魚再怎樣掙扎也不會脫鉤。捕抓到後，要用叫做isapakikni等名稱的木棒敲打鮭魚頭部，這支木棒是用柳樹等樹製作而成，長度約為30~40公分左右。

写真4. isapakikniでサケの頭を叩こうとしているところ。

照片4. 拿isapakikni準備敲打鮭魚的頭部。

◎小事典

2. inawは、アイヌの重要な祭具である。神へのプレゼントになり、祈り詞を神に伝えるメッセンジャーにもなり、inaw自身が人間の暮らしを守ってくれる、という役割を果たす。

inaw是愛努族的重要祭具，所發揮的角色功效有：當作獻給神的禮物，也有當作傳達祈禱詞給神的訊息道具，inaw本身也會守護人類的生活。

アイヌの世界観では、inaw をつけたこの棒でサケの頭を叩くと、その霊魂はこの棒を土産としてくわえ帰って行くものとされている。isapakikniで叩かないと、サケが怒って川を上ってこなくなるという説話も各地にある。

愛努族的世界觀中，認為拿附有inaw的木棒敲打鮭魚頭部，便是將這支木棒當作伴手禮送給鮭魚的靈魂，讓牠咬著木棒帶回去。在各地都有傳說故事提到因為沒有使用isapakikni敲打鮭魚，鮭魚便生氣不再溯溪而上了。

marek漁と女性

実は、アイヌの世界では、男がする仕事、女がする仕事ときっちり分けられている。しかし、私たち伝承者育成事業第3期生は、男の手仕事であっても、女の手仕事であっても、できる限り両方学ぼうという方針のもと研修を行った。marek漁に女性が関わってよいのかどうかということを考え、レポートにもまとめた 。

写真5のように、魚を獲った後は、適宜処理をして様々な用途に用いる。

marek漁法與女性

其實，愛努族的世界中，男性所做的工作與女性所做的工作是受到清楚的區分。但是我們傳承者培育事業第3期生，是在無論男生從事的工作或是女性從事的工作，兩方面都盡可能去學習如此方針下進行研修。我們也曾考量到女性接觸marek漁法這件事是否適當，並將這個考量收入在報告書之中 。

如同照片5所示，捕捉到魚後，進行適當處理並使用在各種用途上。

写真5. サケの処理。右手に握っている刃物はmakiriと呼ばれる小刀。

照片5. 處理鮭魚。右手所拿的刀具是叫做makiri的小刀。

◎小事典

3. marek漁と女性の関わりについて、下記のURLを参照。
http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201511.html#04

marek漁法與女性的相關討論請參閱：
http://www.ainu-museum.or.jp/siror/monthly/201511.html#04

サケを獲るにあたって、まず道具を作るところから始める。道具の材料の採取から始めて、道具を自分の手で作る。道具が出来たら使い、その道具が実際に壊れることなく使用できる。こうした一連の流れを経験できたことを嬉しく感じた。また、先述のように、アイヌ語・衣食住・工芸・芸能・信仰・儀礼・教材開発など伝承者育成事業の研修カリキュラム上は独立した項目になっている。marekを用いた漁を通して、アイヌの世界観、動植物・自然などに関する知識、刃物を使って道具を作ること、採集したものを処理して利用することを学んだ。もちろん、道具や動植物のアイヌ語名も学ぶわけで、研修内容は別個に存在しているものではなく、全部つながっていることを実感した。

「アイヌ」としてのアイデンティティ

私は、母の家系がアイヌである。「アイヌだから」という理由で、学校や地域で私自身が猛烈にいじめられたという経験は幸運にもない。他人より毛深い自分が嫌だった時期があり、親族から心ない言葉を聞かされたこともあったが、自分の生まれをひどく恥ずかしく思った経験もない。これは大変幸せなことだと、私自身感じている。その反面、29～30歳頃まで、「私はアイヌである」という自覚を持つことができなかった。「私たち」の言葉、文化についても全く知らなかった。

私は現在、40歳であるが、“アイヌ年齢10歳”とでも言ったところだろうか。人間が青年期

捕鮭這件事，首先要從製作道具開始。從採集道具材料著手，自己親手製作道具，完成後使用道具，並能在實際使用上不弄壞道具。我很高興能體驗上述一連串的流程。另外，就如之前所述，愛努語、衣食住、工藝、藝能、信仰、儀式、開發教材等在傳承者培育事業的研修課程中，學習使用愛努族世界觀、動植物、自然等有關的知識、學習使用刀具製作工具，學習處理利用所採集的東西。當然，因為也有學習道具或動植物的愛努語名稱，所以我實際感受到的研究內容不是以個別方式存在，而是彼此全部相互連結。

身為愛努族的身分認同

我的母親家系是愛努族。但我本身很幸運沒有「因為是愛努族」這個理由，而在學校或生活地區裡受到過強烈霸凌的經驗。有一段時期我很討厭我比別人體毛多，也曾被親戚說過一些無心之話。但我不曾有對自己出生感受到非常羞愧的經驗。我自己覺得這種情況算是十分幸福。另一方面，我到了29~30歲左右，對於「我是愛努族」這件事仍沒有自覺。我對於「我們」的語言、文化完全都不知道。

現在我40歲，但可以說「愛努年齡10歲」。如同人是在青年期確立身分認同般，我想以「身為愛努族所具有價值、身分位置，」來確認我身為愛努族的身分認同。為此，我一邊學習愛努語、愛努文化，調查雙親或祖先或者地方的事情，思考自己身為愛努族到底是什麼這件事，同時不管是擅長或

にアイデンティティを確立するように、「アイヌとして自分はこうした価値・役割を持っている」というアイヌとしてのアイデンティティを私は確立したいと思っている。そのためには、アイヌ語・アイヌ文化を学び、親や先祖や地元のことを調べて、自分がアイヌとして何者であるかということを考えながら、得手不得手・成功や失敗はあっても、アイヌ文化を実践していくしかないと考えている。◆

是不擅長、成功或是失敗，我想我也只能將愛努文化付諸於實踐。◆

◎小事典

4. 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構https://www.frpac.or.jp/index.htmlを参照のこと。
公益財團法人愛努文化振興・研究推進機關，請參照：https://www.frpac.or.jp/index.html。

5. 本稿では、アイヌ語をローマ字で表記する。
本稿所使用的愛努語採羅馬字表記。

作者簡介｜プロフィル

中井 貴規 NAKAI takanori
公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
博物館運営準備室　研究員
Preparatory Office for National Ainu Museum
The Foundation for Research and Promotion of Ainu Culture

旭川市生まれ。現在、札幌市在住。

旭川の伝承者から知識・技能について伝承を受けること、旭川のアイヌに関する文献や資料の整理、旭川アイヌの歴史を学ぶこと、などについて研究・実践を行っている。現アイヌ語教育事業アイヌ語指導者育成事業講師見習い。2015年度STVラジオアイヌ語ラジオ講座講師。

2011～2014年、北海道大学アイヌ・先住民研究センターにて技術補佐員として勤務。2014～2017年、伝承者育成事業第3期生として、白老町にあるアイヌ民族博物館での研修を中心にアイヌ語・アイヌ文化について学ぶ。研修修了後、北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員を経て、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構博物館運営準備室研究員となる。

現在、白老町に設立される国立アイヌ民族博物館（2020年4月開館予定）の開館準備に従事している。

中井貴規 NAKAI takanori
公益財團法人愛努文化振興、研究推進機構
博物館營運準備室 研究員
Preparatory Office for National Ainu Museum
The Foundation for Research and Promotion of Ainu Culture

旭川市出身，現居札幌市。目前從事繼承旭川傳承者所傳知識、技術、整理旭川愛努族相關文獻或資料、學習旭川愛努族歷史等研究、實踐。現愛努語教育事業愛努語指導者培育事業實習講師、2015年度STV廣播愛努語廣播講座講師。2011～2014年，曾任北海道大學愛努族、先住民研究中心技術助理。2014～2017年，以傳承者事業第三期生身分，以白老町愛努民族博物館的研修為中心，學習愛努語、愛努文化。研修完成後，歷經北海道大學愛努族、先住民研究中心博士研究員，成為公益財團法人愛努文化振興、研究推進機構博物館營運準備室研究員。現在，從事將設立在白老町的國立愛努民族博物館（預定2020年4月開幕）開館準備。